

丹澤美助の〈新注入主義教育〉に関する一考察

増 田 翼

(2013年2月1日受理)

はじめに

〈子ども中心〉か〈教師中心〉か、〈学び〉か〈教え〉か、という近代教育学を代表する対立の構図は、これまで何度となく議論を呼び起こしてきた。そのたびごとに、この議論は時代のイデオロギーや価値観に晒されながらも、一応の理論的解決が図られてきたのである。日本教育史上において、この議論が活発に交わされたものといえば〈大正自由教育運動〉が有名である。周知のように、このときは、それまでの明治期に支配的だった〈教師中心〉主義の教育から〈子ども中心〉主義の教育への転換を意図して、全国的な教育運動が展開された。それがまた、世界的な新教育運動と密接に関連していたことも今では日本教育史上欠かすことのできない史実として必ず明記されるものとなっている。

これに対して、時代が昭和に移るに伴い、次第に自由教育それ自体が衰退を見せていく過程については、一部の研究成果が提出されているにすぎず、実り多き先行研究群が存在するわけではない。一般的理解として浸透しているのは、〈子ども中心〉主義の教育方法として提唱された〈自学自習〉を実践するなかで内部的な矛盾を抱えるようになったという点、加えて国家権力による干渉および弾圧が各地で増加し自由教育の勢力が力を弱めていったという点、などが挙げられよう。しかし、大正自由教育運動に関する豊富な研究群から比べれば、昭和期における自由教育の衰退に関する詳細は未だ不明確な部分が多いといわざるを得ない¹⁾。

さて、本稿において取り上げるのは、まさにこ

の自由教育の衰退に関する一つの代表例といえる史実についてである。それは、今からちょうど80年前となる1933(昭和8)年10月の出来事に始まる。当時、茨城県女子師範学校長を務めていた丹澤美助(1880-1968)^{たんざわよしすけ}が、雑誌『教育学術界』に「新注入主義の教育境に懂れて」と題する論稿を発表したのである。そして、この論稿の発表後まもなくから1936(昭和11)年にかけて、様々な雑誌、刊行物上において〈新注入主義教育〉は取り上げられ、日本教育界全体にわたって多くの反響と論争を巻き起こしたのである。

丹澤が提唱した〈新注入主義教育〉の主眼は、それまで教育界を牽引し続けた〈自由教育〉に異を唱え、教師の〈注入〉にこそ意義を認めるというものであった。これに対して賛否両論の論争が展開され、またそのなかで、そもそも〈自由〉とは何であるか、という再討議が繰り返された。この論争には、それまでの教育界を支えてきた数々の教育学者たちも参戦しており、期間中は非常に活発な議論が重ねられたのである。

このように、日本教育史上たいへん興味深い論争が存在したにもかかわらず、残念ながら〈新注入主義教育〉を中心テーマに据えた先行研究は皆無に等しい。そもそも、〈新注入主義教育〉を提唱した丹澤美助に関する研究が管見の限り一つも存在しない。唯一、丹澤について他者がまとめた著作として、彼の娘、岡本旭子が著した『遠い日・近い人』(新樹社、1981年)が挙げられるが、この書ですら、彼の略歴が記されているにとどまり、それ以上の詳細はほとんど不明なままである²⁾。こうした現状を踏まえ本稿では、①〈新注入主義教育〉論争の詳細、②丹澤美助の生涯史、③〈新

注入主義教育〉研究の意義と課題、以上3点を素描しながら、〈新注入主義教育〉に関する研究の基礎を築くことを目指したい。

I. 〈新注入主義教育〉論争の詳細

上述のように、〈新注入主義教育〉論争のそもそもの発端は、1933年10月から12月にかけて、雑誌『教育学術界』に丹澤美助が「新注入主義の教育境に憧れて」と題する論稿を三度に分けて発表したことに始まる。丹澤は、その論稿の冒頭において「被教育者の個性尊重か教師の理想注入か。敢て世上教育家の批判を仰ぐ」と記し、当初より「個性尊重(子ども中心)」か「理想注入(教師中心)」かという二項対立の図式を読者に提示したのである。その後まもなく、いくつかの中央教育雑誌がその内容を取り上げ、次第に地方教育会雑誌でも反響が広がっていく。

ひとまずここでは、一つひとつの賛否論文を読む比べ整理していくだけの余裕はないが、〈新注入主義教育〉論争の史的変遷について、1933年から1936年の間に限定して簡単に辿ってみたい。

1. 『教育週報』『教育時論』

いち早く〈新注入主義教育〉に関して意見を表明したのは、渡部政盛(1889-1947)³⁾であった。渡部は、丹澤の論稿が雑誌『教育学術界』に発表されるたびに、週刊新聞『教育週報』に「丹澤美助氏の新注入主義の教育を読む」と題した記事⁴⁾を掲載し、そのなかで〈新注入主義教育〉に批判を浴びせた。

渡部はまず冒頭で、丹澤が〈新注入主義教育〉を主張したのは、「自由主義教育凋落の波に乗って、色々の主張が半ば反動的に台頭しかけて来た」時期に重なり、丹澤の〈新注入主義教育〉もこうした「反動教育主張⁵⁾」の一つ、と位置づけた。そのうえで渡部は、各章を概括しながら論評を進めていったが、満足いく内容ではなかったらしく、結局は、三度にわたる論評の終止符として酷評を与えるに至っている。渡部はいう。

丹澤氏の説論は、……教育史的には幾多の

誤謬があり、教育学術的には浅薄、哲学的には旧式な、氏の思想を暴露しておる以外に何等のとりえもなく、また、これを實際上より見る時は、准教員代用教員を啓発する以外には大して価値のあるものとは思われずただ、氏の一家言一告白に止まるべき性質のものである。尤も、紙屑を多量に造ったと云う点に於ては表彰されるだけの価値はある⁶⁾。

渡部がこのようにいうのにも理由があった。それというのも、丹澤の論稿が、随所で否定したと思われる内容を次には肯定するといった自家撞着に陥っていたためである。渡部には、独自の世界観を構築するほど一貫した思想体系がそこには認められず、単に前時代への反動を目的とするものとして映ってしまったようである。渡部のように教育の理論的考究に長けた者からすれば、丹澤の論はあまりに稚拙に思われたことだろう。真理を導き出すことに重きを置いていた渡部のような教育学者の目に触れるだけであったならば、おそらく、丹澤の論はそれ以上の発展を見せることもなかったであろう。

けれども、丹澤の論は、意外にも現場教員たちの間で話題となっていった。それはおそらく、〈新注入主義教育〉の主張が、閉塞傾向にあった教育現場の雰囲気を一掃するかのごとく時風を掴んだ文章で、しかも非常に大衆向けの文体で書かれており、講壇教育学のような高尚な教育論を展開するものではなかったからであろう。丹澤の文章は、まともある思想というには及ばずとも、教育界に一石を投じるだけの魅力は有していたということなのかもしれない。

さて、翌年1934(昭和9)年に入るとまもなく、雑誌『教育時論』は〈新注入主義教育〉に触れる二つの論稿を掲載した。田制佐重(1886-1954)の「反自由主義教育の社会的根柢―但し自由主義の精神は没却せず―」と上田信一の「丹澤氏の『新注入主義の教育』を駁す」がそれである。田制は〈新注入主義教育〉に短く触れつつ、当時の教育者たちの様子を端的に描いてみせた。

近時、水戸女子師範の丹澤校長が投じたる

新注入主義の教育の大波紋に、今さらながら自由主義教育家たちが余りに騒ぎ立てる有様は、いったい何たる慌て方ぞ。……お互い教育殊に日本教育の本質に向って大いに画策しようではないか。西洋の「学説」などよりは日本の「精神」に立ち帰った方が、教育を見直す上にも、却って早分りするのではないか⁷⁾。

他方、上田は、丹澤の論稿が発表まもないにもかかわらず、的確に〈新注入主義教育〉の難点を記している。上田の文章を以下に引用しておこう。

丹澤氏の「新注入主義の教育」の本体を慎重に考究してみると、それは教師の感激と確固たる人生観乃至国民観とに立つ人格の教育という点にあると思うのであるが、それを丹澤氏は殊更に「新注入主義の教育」という誤解され易い言葉を使用され、而もこれを雄々しくも絶叫せんがために、個性開発の教育に対して一種の詭弁を以て難ぜられている⁸⁾。

丹澤の論が学術的ではなく、一種の詭弁を含んでいるというのは多くの批評者が語る点である。しかし、それにもまして、丹澤の論を評価する傾向が存在したのは、教育現場全体が必ずしもうまくいっていない現状があるなか、その突破口となる可能性をいくらかでも含んでいる丹澤の論を梃子として、昭和の新たな教育へと期待を寄せようとする教育者たちが少なくなかったことの表れなのかもしれない。

2. 『教育学術界』：「新注入主義教育批判号」

1934年2月には、雑誌『教育学術界』が「新注入主義教育批判号」と題した特集を組み、巻頭言以外にも19編の賛否論文を掲載するなど反響は広がっていった。巻頭言は『教育学術界』の編集者であり、かつて大正自由教育運動のさなかには八大教育思潮を企画するなどした^{あまことどむ}尼子止によって書かれている。彼はいう。

最近教育思想界の指標と動向とは反注入主

義的一色をもって終始し、自由教育、自動教育、個性教育等々を中心勢力として注入主義の牙城に攻め寄せ、現下の教育界は思想的にも実際的にも注入主義の片影だも認めなかったかの如く思惟せしめていたところ、丹澤氏の新注入主義の提唱によって所謂、自由教育、自動教育、個性教育に一大衝激を与え、昨春秋より今春にかけて、教育評論壇の好題目として、新注入主義教育論の批判は各所に展開し、教育思想界は頓に活況を呈するに至った。……教育思想も一般思想のそれの如く旋動的に進展しつつあるものである以上、本特輯号は必ずや本邦教育思想発展上に十二分の意義あるものと思ふるのである⁹⁾。

19編の賛否論文を概括すれば、賛成派の主張は自由主義を標榜する教育上の主張は理想にすぎない、という点に、反対派の主張は丹澤の概念規定が曖昧であり理念の混同が随所に見られる、という点に集約されよう。大半の論文は賛成派と見なせるが、確実に反対の意を表明したもの一つに、自由教育の開祖、手塚岸衛(1880-1936)の「自由教育の立場から」が挙げられる。手塚と丹澤は「旧知の間柄」だというのが、「単なる時の勢の上からのみ」、「反動的の思ひつきばかりでなく、もっと学的に考察しないなら、一種の策としか見られない」と記したうえで、「自由教育は自然主義の教育ではない」「児童を価値可能態と見たい」「個性は教育の対象であり児童は教育の主体である」との見解を残している。

ほかにも反対派の人物として、文学博士で教育学者であった野田義夫(1874-1950)が挙げられる。彼は「雑誌の上に見る教育の理論と実際教育に採用され実行される理論とは何時も甚しい相違があり、丹澤が批判の矛先として繰り返す「自由教育」の「理論も実際も存在せぬものとすれば」、「的なきに矢を放つが如し」だと指摘している。そして、こうした〈新注入主義教育〉を唱えることについては、「日本精神が高潮している非常時日本の今日に於て……教育界の視聴を集める絶好の機会であるが、「自己陶醉の危険を免れぬであろう」と苦言を呈したのである。

さらに当時、広島高等師範学校講師であった越川彌栄は、「丹澤氏の論文」は「学説というべきものでない」。「普遍妥当的真理の闡明といはんよりは、寧ろ現下に即し、時勢を大観しての実際の論策である」とし、批判的考察を展開している¹⁰⁾。

こうした様々な反響を受けつつ、丹澤は自説の補強に乗り出すべく、各方面からの批判に対する回答を寄稿していくのである。たとえば、『教育学術界』1934年4月号掲載の「再び新注入主義の教育境を指さして（上）」では、①自由主義の用いる「自由」とは「自然主義的」と「理想主義的」の二つがある、②〈新注入主義教育〉は反動的な教育思想ではない、③我が教育研究は学術的より「悟道的」態度を目指す、といったことを新たに表した¹¹⁾。また『教育学術界』1934年5月号掲載の「再び新注入主義の教育境を指さして（下）」では、④「注入」には「非価値的注入」と「価値的注入」の二種がある、⑤〈新注入主義教育〉は、「教師中心」か「児童中心」あるいはその「折衷」を求めるのではなく「教師中心」のなかに「児童中心」を「包容」するものである、といった回答を提出するなどしている¹²⁾。

3. 地方教育会雑誌

さて、このように中央の教育雑誌が特集を組み〈新注入主義教育〉を大きく取り上げたことで反響が広がりを見せていく一方で、同時期の各地方教育会雑誌でも〈新注入主義教育〉に対する賛否が交わされるようになっていく。

たとえば、当時の丹澤が活動拠点としていた茨城県の教育現場においても〈新注入主義教育〉は取り上げられている。1934年5月には、茨城県真壁郡大寶小学校教員、原竹次郎が「児童を凝視して敢て丹澤先生の新注入主義教育を反駁す」というタイトルのもと、「教師の人格を教育の第一と観、その修養を最大の急務とし、そしてその人格によって児童を感化せんとする事は双手をあげて賛意を表する」が、「近代教育界に於ける進歩は教育方法の原理を児童の自発性に求めた点にある」、したがって「すべての方法が無視した注入の言葉には絶対に賛する事ができぬ」と正面から

批判を向けた¹³⁾。

翌6月には、茨城県稲敷郡長戸尋常高等小学校教員、大津祐四郎が「丹澤先生の新注入主義教育論を吟味す」において、以下のようにまとめつつ、丹澤を批判している。

児童には自己発展性がある、この説は新教育の発見で、全世界の教育者教育学者が賛意を表しているのである。又吾々が毎日児童を見つめている事実より考察してもこの事は肯定する事が出来るのである。故に私は児童の本性を無視した注入一点張りの教育注入以外に何物もないといふ意見にも反対なのである¹⁴⁾。

これに対して、茨城県新治郡虫掛尋常小学校校長、小松崎光は、1934年9月掲載の「丹澤先生の新注入主義教育論を讀みて」なる論稿のなかで、丹澤の論を以下の如く高く評価し反対派の陣営を牽制した。

墮落せる現代教育の復活の道として、行詰れる日本教育を打開し、新興日本教育の建設策として先づ教師の自覚と絶えざる修養とを基とし、従来一蹴されて居た没我的、苦行的、鍛錬主義を復活し、悟道的態度の下に教師児童一体となって精進苦行の途を辿る事が真の教育道であると唱えられ、……教師の人格より流出する熱と力とに信頼し、之が実現の方案として新注入主義論の下に開発と注入の握手を求め、以て現時の教育を救わんと天下に絶叫せられたる先生の偉大なる人格に敬意を表する¹⁵⁾。

また同時期、堅倉小学校教員、眞崎信は「訓育論を背景として自由主義注入主義教育を吟味す(一)」のなかで、次のように語っている。

自由主義の注入主義の或は新注入主義のと論争されているが、論争され研究され検討され止揚されることは本当に好ましい事であるには相違ないが、こうした論争は古来よりの教育界に投げ懸けられた一つの大きな考案と

なっているのではないのでしょうか。併しながらこうした論争たるや、無用の論争とも言ふべきものであって、教育には両方面がともに必要であって、その何れをも欠くべからざるものでなければなるまいと私は考察するものであります¹⁶⁾。

眞崎は続けて1934年10月号に「訓育論を背景として自由主義注入主義教育を吟味す(二)」を寄稿しているが、このなかでも「自由主義の教育、注入主義の教育とは如何なる思想的背景のもとに提唱せられているか、そして如何なる教育的作用に生きんとするものであるか、而して吾等は両者を如何にみつむべきであろうか。世の教育實際家は此の点に関して明確なる認識をもたねばならぬと最近痛切に感じさせられている¹⁷⁾」と建設的な意見を述べ、この論争への冷静な対応を求めた。

いずれにせよ、丹澤の目に確実に触れるであろう茨城県教育界においても、賛否両論の論争が展開されている点が興味深いといえよう。ほかにも、丹澤が若きころ奉職していた新潟の地において、新潟県教育会発行の『越佐教育』誌上で論争があったことが記録として残っている¹⁸⁾。

4. 丹澤美助『新注入主義の教育』出版

こうした様々な反響も受けながら、丹澤自身は、1934年9月に著書『新注入主義の教育』を東京モナス社から出版した。当時モナスが掲載した宣伝ビラには次のように刻まれている。

自由教育の天地に楽土を求め、新教育の王土となせる教育界に向って著者一たび「教育学術界」誌上に於て新注入主義を提唱するや、教育界に賛否聲勃然と起り同誌は批判號を特輯するに至り、茨城女師へは全國より參觀來訪者殺到し著者の意見をたたくもの應接に違なきまでとなり、且つ各方面より著者にその所説の徹底的解明を求むるや切、忙中寸閑をあてて鏤骨粉骨の結果本書を成す。全日本の教育者よ、自由は果して教育の花園であるか、新注入の教育境とは何ぞ、速に本書を求めて教育の根本問題の解決を図られよ¹⁹⁾。

本の内容としては、1933年に書かれた「新注入主義の教育境に憧れて」の原稿を下地としながら、各批判への回答として1934年4月・5月に寄稿した論文「再び新注入主義の教育境を指さして」を適所に加え、全体としての体裁を整えたものといえる。この書の出版部数については、「昭和11年までに五版となった²⁰⁾」というから、かなり広範に読者が存在したことが想像できよう。

かくして丹澤の〈新注入主義教育〉は、この著作を以て一応の頂点に達した。彼の〈新注入主義教育〉の考えは、わずか一年足らずの間に日本教育界からの反響を踏まえつつ鍛え上げられ、今や一つの思想体系へと進展を見せようとしているのであった。

5. 『教育論叢』

『新注入主義の教育』出版後も、丹澤は自説の主張および補強の手を緩めなかった。雑誌『帝国教育』1934年11月号に「新注入主義の教育に就て改めて世の批判を求む²¹⁾」を掲載したほか、翌1935(昭和10)年11月には、雑誌『教育論叢』誌上に「自学自習主義の没落²²⁾」という論を寄稿するなどしている。

なお『教育論叢』編集部は、丹澤の「自学自習主義の没落」という論文の反響に応えるために、翌月号で「自学主義の本義を説いて丹澤氏に酬ゆ」という特集を組み、そのなかに、当時、明星学園長を務めていた赤井米吉(1887-1974)の「個人的自学自習より集団的自学自習へ」という論文を含めるなどして注目を集めた²³⁾。

すると翌1936年2月に、丹澤は再び雑誌『教育論叢』誌上に「再び自学主義を俎上に上ほし新注入主義の難者に答ふ」と題した論稿を投稿した。ここで丹澤は、「現下の教授界に於て考察を要すべき尤も重要な問題」を「一斉教授と個別教授」の「再考察」だと提示したうえで次のように述べたのである。

個別指導は学校教育に於て経済上不可能なるのみならず、……教育上決して理想的のものにあらざるのみか、こは却て児童の委縮と

無活気とに終るを体験するものである。……個性を餘りに差別観視するは現代教育の一大病患である。……集団教授を以て教育の理想貫徹に可なる所以を発見して余は寧ろ教育上、一大光明を認め得たるの感がある。……教師の偉大なる活動は能く集団教授の中にあつて十分に個性を認め個性を動かしその発展向上を期するの可能なるを悟るに至った²⁴⁾。

もちろん、こうした論が広く支持を得て、ますます発展を見せていく背景には、1930年代後半という時期が関係していることはいうまでもない。1933年に始まり、次第に思想としての輪郭を見せ始めた丹澤の論もこのあたりでその歩みを緩めていく。管見の限り、これ以後、丹澤自らが〈新注入主義教育〉について綴っている論考は見当たらないが、それはまた、上記の論文が発表された翌年の1937年に始まる日中戦争の影響があるのかもしれない。

II. 丹澤美助の生涯史

我が教育の過去30年は徒に個性尊重の児童中心主義に終始した。我等は果敢なくも彼の自由主義の思想に誘拐せられて永く教育の邪道に踏み迷うていた。即ち注入排撃、開発礼讃、自発活動一点張の無目的、没理想の教育に憂き身を窶していた²⁵⁾。

これは1934年11月、雑誌『帝国教育』に寄稿した丹澤の記述の一部である。たしかに、筆者(増田)がかつて取り組んだ群馬県における大正新教育運動に関する研究²⁶⁾のなかでは、丹澤は群馬県にいち早く〈自由教育〉を広めた人物として登場していた。実は彼は、人生の半ばまで〈自由教育〉を支持する側の人間だったのである。その丹澤がなぜ、〈新注入主義教育〉という正反対の考えを表明するに至ったのであろうか。この点を明らかにするには手元の史・資料が不十分なため今回そのすべてを叙述することはできないが、丹澤がどのような人生を送った人物なのかという点を中心に、彼の生涯史を簡潔ながらまとめてみるこ

とにしたい²⁷⁾。

1. 出生と生い立ち

丹澤は、1880(明治13)年、山梨県東八代郡増田村(現、笛吹市)の大農家に生まれた。彼自身は、早くに両親を失い、継母に育てられている。また、彼の親が郷土の政治活動のために莫大な借財を残して死んでしまったために、跡を継いだ丹澤自身は、何年もかかって返済に追われたのだという。さらに経済的苦しみとともに、若いときに結核を患うなど、苦勞の耐えない人生を送ったようである。一方で、中学生時代から優れた文才に恵まれ、演説講演もうまく、能書家でもあったなど、その多才ぶりは師範学校長を歴任していた際に、遺憾なく発揮されていくこととなる。

さて丹澤が、江戸時代の甲府学問所「徽典館」を淵源とする甲府中学を経て早稲田大学文学部哲学及び英文科(英文哲学科)を卒業したのは1903(明治36)年1月のことである。その後直ちに山梨県師範学校教諭として赴任し、教師生活の第一歩を歩み始めている。

2. 群馬の地に〈自由教育〉を

故郷山梨を離れ、北海道庁立上川高等女学校教諭、新潟県高田師範学校教諭を務めた後に、丹澤は、群馬県女子師範学校(以下、群女師と表記)教諭となる。彼の教育人生のなかの特筆すべき時期の一つとして、この群馬は欠かすことができない。なぜなら、彼は、この群馬の地において、新教育運動を牽引し〈自由教育〉を広めようと活動したからである。彼の群馬での活躍について少し述べておくことにしよう²⁸⁾。

丹澤が奉職していた群女師は、当時の群馬県のなかでも〈旧教育〉から〈新教育〉への〈教育論〉上の転換をいち早く〈実践〉というかたちへと結実させようと試みた学校であった。すでに1914(大正3)年5月に群女師附属小学校が出版した『教授の実際』には、その全科教育方針について、①児童の自己活動を重んじ自学自習の習慣を馴致すべきこと、②教授は創作的活動を重んずべきこと、③教授は発表を重んずべきこと、④児童の個性を重んじ分团的、個別的指導をなすべきこと、⑤

教材の主眼点を明らかにし之を徹底せしむべきこと、と書かれていた²⁹⁾。そして群女師では、この方針に従うかたちでの実践が追究されていったのである。こうした群女師の教育者たちの意気込みや気風を表すものとして、1915（大正4）年2月に丹澤が著した「上毛の教育家に寄する書」を見ておこう。

吾人は斯る教育界の矛盾の原因を探求して之を撲滅して更らに真摯なる態度と教風とを呼び来らざる可からざる也。……吾人は今や長夜の困夢より醒めて茲に新なる自覚の上に立て旧教育を捨て新教育の精神を江湖に宣伝せんとするもの也。……上毛の地、……是れ誠に教育界の保守思想を打破して新教風を天下に宣伝するに尤も好適なるを覚ゆ。吾人は教育界の現状を洞観して其暗黒面を発見すると同時に之が改革の新使命を上毛の教育家に見出さんとするもの也³⁰⁾。

この後まもなく、群女師出身の教員らは、群馬県内の各尋常高等小学校において種々の運動を展開していくことになるのである。

3. 茨城の地から〈新注入主義教育〉を

群馬での活動を終え、丹澤が次に向かったのが富山であった。富山師範学校教諭を務めた後に、彼は富山県高岡高等女学校の校長として迎えられることとなった。その際、同校で英語教員として働いていた一人に吉田久（1885-1973）がいる。彼女は、女性の地位向上を目指し富山県射水郡大島村婦女会を設立し会長を務めた人物であり、また1956（昭和31）年から1969（昭和44）年まで富山県知事を務めた吉田實（1910-1982）の母でもあった。吉田實は、その自伝のなかで次のように述懐している。

母も数代の校長に仕えたが、母のこのような教師生活を最もよく理解し、協力していただいたのは、丹澤美助校長だったようだ。したがって、母も丹澤先生を大変尊敬していた³¹⁾。

さて、1920（大正9）年から1927（昭和2）年の間、群馬県前橋高等女学校長時代を経た後、丹澤は長野県社会教育主事を務めることとなった。この間は、これまでの学校職員としての立場ではなく、広く長野県内の社会教育の任を授かり、県内の様々な活動に精を出した時期に当たる³²⁾。

そして、その後奉職することとなったのが、茨城県女子師範学校の校長職であった。この期間において、彼が〈新注入主義教育〉を提唱したことは前述した通りである³³⁾。

4. 宮城の地で

茨城を離れ、丹澤が最後の職場として向かったのは宮城であった。1935年4月、宮城県女子師範学校長として宮城の地に赴任した丹澤は、県下教育界に様々な波紋を広げていったのだという。雑誌『宮城教育』には、赴任直後の丹澤の所信と抱負が記されている。

吾人は今、現代教育の一大転換に立っている。教育界の寵児たりし自学主義の教育は、今や力なく没落の運命をたどっている。我らはここに真に生命に燃ゆる「新しき理想の注入教育」に復帰せねばならぬ。

さらに彼は、雑誌『宮城教育』誌上に「時代の寵児自学主義の弔鐘」（第439号）を掲載し、ここで自らの教育観を主張した。こうした丹澤に対しては、当時、宮城県女子師範学校附属小学校主事であった二階堂清寿（1892-1976）が、『宮城教育』誌上に「丹澤先生の教を乞う」（第440号）という論文を寄稿し、そのなかで「人間性をどうみるか」「新注入主義の真相如何」「自学主義は葬られるべきか」の3点を尋ねている。丹澤は、翌号において、「自学主義に就いて二階堂校長に答ふ」（第441号）という論を書くなどして、ここ宮城の地でも「新注入主義教育」に関する論争を展開していったのである³⁴⁾。丹澤はその後、1943年3月まで宮城県女子師範学校長の任を務めている³⁵⁾。

なお退職後の丹澤は、「東京にあって盆栽を楽しむ」、「その道の大家として数冊の専門書を著³⁶⁾」すなど、晩年に至るまで精力的に著述活動を

継続していった³⁷⁾。

Ⅲ. 〈新注入主義教育〉研究の意義と課題

ここまで、〈新注入主義教育〉論争の詳細および丹澤美助の生涯史、について見てきたが、最後にここからは、〈新注入主義教育〉を研究することの意義および課題について記し、基礎的研究としての本稿を閉じたいと思う。

1. 日本教育史研究としての意義と課題

〈新注入主義教育〉を教育史研究のアプローチから捉えることで、〈子ども中心〉か〈教師中心〉か、〈学び〉か〈教え〉か、という対立図式の史的変遷、史的様相を明らかにすることができる。特に、1930年代を生きた教育関係者一人ひとりがどのような立場を表明し、そこで何を主張したのかを詳らかにすることで、この時期の教育関係者が「自由」をどのように解釈し、「注入」の必要性をどのような観点から導き出そうとしたのかを理解可能となる。また、この論争下における様々な主義主張を拾い集めることで、〈自由教育〉に対する不満が実際の教育実践における負の側面といかなる結びつきをもって語られていくのか、あるいは次第に「注入」という言葉が受け入れられていき「自由」と「注入」とが拮抗し合う状況となる過程はどのようなものだったのか、といった点も明らかにできるであろう。

従来、1930年代の教育を対象とした研究では、〈郷土教育〉〈生活綴方〉〈戦時教育〉などを問う側面が強かった。しかし、本研究のように〈新注入主義教育〉に焦点を当て、それを取り巻く様々な論争を跡づけていくことで、〈自由教育の衰退〉と1930年代の教育との関係性およびその昭和教育史での位置づけが鮮明になる。それがまた、昭和前期の教育史に対する新たな理解にもつながっていくと思われる。

他方、丹澤美助の個人史研究にも意義が認められる。彼の教育観は、その生涯のなかで日本各地を転々とし、各地方の教育事情も加味しつつ築かれていったはずであり、特に、〈自由教育〉支持から〈新注入主義教育〉提唱へとなぜ転向を見せた

のか、という点は、非常に興味深い教育史研究となろう。また同時に、丹澤美助の活動の詳細を明らかにすることが、日本教育界全体に対する彼の活躍を正当に評価することにもつながっていく。

さて、こうした研究を遂行するに当たっては、広範な史・資料調査が求められ、また研究の過程で登場する様々な人物の立場や丹澤との相関図を明確にする必要がある。この時期の教育学関係史・資料は散逸しているケースが多く、どれだけ収集できるかが、研究の今後を定める大きな課題となるだろう。

2. 教育言説研究としての意義と課題

教育言説研究のアプローチから〈新注入主義教育〉を捉えることは、対立図式の背景に潜む言説間の凌ぎ合いや、対立関係それ自体の意味とは何かを問うことにつながる。

そもそも、〈子ども中心〉か〈教師中心〉か、〈学び〉か〈教え〉か、という〈どちらか一方〉ではなく、〈どちらも〉という組織的取り組みが教育において最良であるのは当然なことである。それにもかかわらず、いつの時代も教育は、〈どちらか一方〉を選択しようとする。その理由は、〈どちらも〉ではメッセージ性が弱く不安定だからである。〈どちらか一方〉を支持し方向性を鮮明にすることが、特に教育政策、教育現場においては必要とされてしまう。残念ながら、時代の要請そのものが、教育を極端に走らせてしまう危険性を孕んでいるのである。とりわけ理論・実践を取り結ぶ教育学の不在が目立つようになる時期において、個々が教育を語るその立場は極端なものになりやすい。

真理本質を探究する教育学者の姿勢がときとして社会からの関心と呼ばず、批判やジャーナリズムに関心が集まるのも世の常である。もちろん、一流の学術的体裁を誰に対しても保つことが研究者の大きな役目であることに間違いはない。しかし一方で、人々への普及という点、人々から支持を得るという点を無視して学術の発展は見込みづらい。教育論というのは、ときにメッセージ性が求められ、またメディアとの親和性が鍵を握ることがある。こうした点を踏まえると、丹澤の〈新注入主義教育〉が、様々な教育学者からの批難を

浴びつつも人口に膾炙していく過程というのは、教育論の普及過程を捉えるうえでもたいへん興味深いものだといえるだろう。

さて、こうした研究を遂行するためには、1930年代の教育に関する言説空間全体の布置状況を明らかにする必要がある。また同時に、メディアとしての教育雑誌の勢力図や立場の違いなども併せて明確にしなければならない。いわば、教育に関する当時の権力構造を詳らかにすることが、研究の進展には欠かせないといえよう。

【註】

- 1) 自由教育衰退に関する研究としては、たとえば、山根俊喜「城戸幡太郎の教育学方法論—自由教育論の超越」(『鳥取大学教育地域科学部紀要』教育・人文科学3(2)、2002年)や永江由紀子「大正末-昭和戦前期における「訓練」の展開」(『飛梅論集』7、2007年)のように、大正期に普及した〈自由教育〉という理論を1920年代・30年代の教育論がいかに乗り越えようとしたのか、という点に着目する諸研究が見受けられる。
- 2) 永江由紀子は、九州大学に提出した修士論文のなかで、「訓練」「訓育」概念が大正自由教育から昭和教育への橋渡しを可能にした点を明らかにする際、〈新注入主義教育〉とその反響に若干言及しているようだが、彼女が公表している他の論稿には〈新注入主義教育〉に関する記述が見当たらない。
- 3) 渡部政盛は、1889(明治22)年に山形県東置賜郡沖郷村に生まれた。小学校教員から雑誌『教育界』(金港堂)記者を経て、教育評論家および批評的教育学者となった人物である。『最近教育学説の叙述及批判』(大同館、1918年)、『現今改造的教育思潮批判』(大同館、1921年)は、二つ合わせて一万部以上を発行したという。彼については、小西重直(1875-1948)が倉敷で開催された初等教育研究大会席上において、「渡部氏は教育評論の天才であり、教育学の組織者であることは世間周知の事実である」と評している。詳しくは、大日本学術協会編『日本現代教育学大系』第2巻(モナス、1927年、301-306頁)を参照。
- 4) 渡部政盛「丹澤美助氏の新注入主義の教育を読む」週刊新聞『教育週報』教育週報社、1933年10月21日付、11月18日付、12月23日付。
- 5) 渡部は、この論評のなかで、当時の時局を「個人主義乃至人格主義と集団主義」あるいは「自由主義と統制主義」との「交代期」だと記している(『教育週報』1933年10月21日付)。
- 6) 『教育週報』1933年12月23日付。
- 7) 田制佐重「反自由主義教育の社会的根拠—但し自由主義の精神は没却せず—」『教育時論』第1750号、開発社、1934年1月25日、13頁。
- 8) 上田信一「丹澤氏の『新注入主義の教育』を駁す」『教育時論』第1750号、14頁。論稿のなかで上田は、以下のように丹澤の考えを端的に示している。「丹澤氏の論述は、個性開発主義乃至は児童中心主義の教育は、児童の本能的個性の自然的発展に教育なるものを全然委託して、其の間、何等教師の指導誘掖助言啓発の作用を加えない、所謂自然主義的個人的教育であって、其の結果、個性開発に立つ自然主義の教育は、つまり教育せざることと同一なりと論断され、而も従来の教育は第一次の注入偏知の教育なり、これが反動として児童の自然的発展と、自由進展とを有力に認める自由主義の勃興となり、其の自由主義の教育は何等教育の実際に対して実蹟を挙げる事が出来なかつた。故に今日の教育は、よろしく教育者の人格による理想注入の新教育に抛らねばならぬと論ぜられるのである。」「個性開発第一主義の教育は何等以上の如き教育の根本立脚に立たずして、ただ自然の発展に全然委託放任して行ふ自由奔放の教育なりと断ぜられている」。
- 9) 尼子止「巻頭言」大日本学術協会編『教育学術界』第68巻第5号、モナス、1934年2月、1頁。
- 10) この特集号の具体的内容については、石谷信保(1901-1988)が概括した「本邦教育思潮概観」東京帝国大学教育学研究室教育思潮研究会編『教育思潮研究』第8巻第3輯(目黒書店、1934年、200-218頁)が参考になる。
- 11) 丹澤美助「再び新注入主義の教育境を指さして(上)」『教育学術界』第69巻第1号、1934年4月。なお、同誌の「編輯後記」には「新注入主義の丹澤氏、茨城の人々は新注入主義教育論といはで『ビスケズム』と呼ぶ、事ほど有名な所論、本誌の批判號によって再び稿を起された。ビスケズムも愈々堂に入って来た。更に反讀の上批判あれ」(160頁)と書かれていた。
- 12) 丹澤美助「再び新注入主義の教育境を指さして(下)」『教育学術界』第69巻第2号、1934年5月。ほかにもこの時期、丹澤は、「新注入主義教育の一心境」(『帝国教育』第650号、帝国教育会、1934年6月)などを書いている。なお、各方面からの批判に応えた回答内容の検討については、また別の機会に譲ることにしたい。
- 13) 原竹次郎「児童を凝視して敢て丹澤先生の新注入主義教育を反駁す」『茨城教育』1934年5月号、茨城県教育会、45-52頁。
- 14) 大津祐四郎「丹澤先生の新注入主義教育論を吟味す」『茨城教育』1934年6月号、14-18頁。
- 15) 小松崎光「丹澤先生の新注入主義教育論を讀みて」『茨城教育』1934年9月号、32-38頁。
- 16) 眞崎信「訓育論を背景として自由主義注入主義教育吟味す(一)」『茨城教育』1934年9月号、39-43頁。
- 17) 眞崎信「訓育論を背景として自由主義注入主義教育吟味す(二)」『茨城教育』1934年10月号、20-23頁。
- 18) 〈新注入主義教育〉への反対論としては、燕小学校訓導、菅沼謙一郎の「新注入主義教育論を讀みて」(『越佐教育』第495号、新潟県教育会、1934年1月)が挙げられる。また賛成論には、中頸城郡田野原小学校、折原敬蔵

- の「新注入主義と之が教育法」(『越佐教育』第503号、1934年9月)などがある。また新潟県教育会が発行する『越佐教育』には、丹澤自身の寄稿論文も存在している(丹澤美助「現代教育の清算と新注入主義教育の使命」『越佐教育』第502号、1934年8月)、(丹澤美助「新注入主義の教育に就て改めて世の批判を求む」『越佐教育』第505号、1934年11月)。詳しくは、新潟県教育百年史編さん委員会編『新潟県教育百年史』大正・昭和前期編(新潟県教育委員会、1973年、488-492頁)を参照。
- 19) 『教育学術界』第70巻第2号、1934年11月、裏表紙。
 - 20) 『新潟県教育百年史』大正・昭和前期編、489頁。
 - 21) 丹澤美助「新注入主義の教育に就て改めて世の批判を求む」『帝国教育』第661号、1934年11月、38-42頁。
 - 22) 丹澤美助「自学自習主義の没落」『教育論叢』第34巻第5号、文教書院、1935年11月。
 - 23) 論評「自学主義の本義を説いて丹澤氏に酬ゆ」『教育論叢』第34巻第6号、1935年12月。この特集には、以下のような論文が寄稿された。赤井米吉「個人的自学自習より集团的自学自習へ」、村中兼松「生命の内部的要求重視」、森本小百合「時代逆転の教育」、八木博「誤まれる学習経済論」、板津専造「固定価値の強要」。
 - 24) 丹澤美助「再び自学主義を俎上に上げし新注入主義の難者に答ふ」『教育論叢』第35巻第2号、1936年2月、29-41頁。
 - 25) 丹澤美助「新注入主義の教育に就て改めて世の批判を求む」『帝国教育』第661号、1934年11月、39頁。
 - 26) 拙著「〈旧教育〉から〈新教育〉への転換を意図する教育者たち——群馬県における大正新教育運動への道程およびその展開を中心に」山崎高哉・労凱声共編『日中教育学対話Ⅲ』春風社、2010年、345-380頁。
 - 27) これ以降、丹澤の生涯史の叙述については、岡本旭子『遠い日・近い人』(新樹社、1981年)を参考にした。なお、各校就任年月など詳しい履歴については、まだまだ不明な点が多い。この点、今後の研究に俟ちたい。
 - 28) 群馬師時代の丹澤の著作には以下のようなものがある。
 - 「上毛の教育家に寄する書」『上野教育』1915年2月号。
 - 「古人崇拜とは何ぞや」『上野教育』1915年4月号。
 - 「人格的教育と我国の教育」『上野教育』1915年7月号。
 - 「ノルダウの現代教育観」『上野教育』1916年2月号。
 - 「現代学校体育に対する根本的疑義」『日本学校衛生』第4巻第5号、1916年5月。
 - 29) 群馬県教育史研究編さん委員会編『群馬県教育史』第3巻、群馬県教育委員会、1974年、165頁。
 - 30) 丹澤美助「上毛の教育家に寄する書」『上野教育』第328号、群馬県教育会、1915年2月、1-7頁。
 - 31) 吉田實伝記編さん委員会編『吉田實とその時代』桂書房、1986年、58頁。
 - 32) 長野県社会教育主事時代の丹澤の著述活動としては、丹澤美助「賀詞に代へて」渋谷俊編『耕南古希記念』(偕老荘出版部、1927年、20-21頁)などが現存している。
 - 33) 茨城県女子師範学校長時代の丹澤の著作には以下のようなものがある。「経済生活上より見たる水戸学の考察」『茨城教育』1933年1月号。「教育の作業化経済化の急務」『茨城教育』1933年8月特輯号。「我が教育の一大転換期迫る」『茨城教育』1934年5月号。
 - 34) 宮城県教育委員会編『宮城県教育百年史』第2巻、ぎょうせい、1977年、418-419頁。あるいは、584-585頁参照。
 - 35) 宮城県女子師範学校時代の丹澤の著作としては、「東北振興と栄養改善」日本放送協会編『ラヂオ講演講座』日本放送出版協会、1939年、21-27頁(これは、1938年12月に開講された仙台中央放送局主催のラジオ放送「第2次東北振興講座」の原稿である。丹澤は、12月12日放送分の回に講師として登場した)や、『闘病から長寿へ』(博文館、1942年)などが挙げられる。
 - 36) 『吉田實とその時代』、58頁。
 - 37) 晩年の丹澤の著作には以下のようなものがある。『実験盆栽の培養と仕立方』博文館、1939年。「松と松の盆栽を語る」『農業世界』第38巻第3号、博友社、1943年3月。『盆栽の新研究：理論・実技』加島書店、1958年。『新時代の盆栽』加島書店、1966年。